

氏 名 森 重 拓 三  
 学位の種類 博士（社会学）  
 学位授与年月日 1999年3月31日  
 学位論文の題名 **あいまいな進学動機の社会学的研究**  
**- 動機・制度・相互行為の連関分析 -**

### 【論文内容の要旨】

本論文（学位請求論文）は、著者が博士課程在籍中に調査研究した成果をまとめたものであり、この間に日本社会学会での報告や雑誌（『産業社会論集』）等において既に発表した論文が基礎になっている。「明確な目的意識を持たず、周囲の雰囲気にならされて進学する生徒が増えてきている（文部省）」という、中学生にみる高校進学動向に注目し、著者自身が試みた高校進学の意識調査、自由回答法による作文作成「なぜ高校へ進学しようと思うのか」「進学に影響を与えてきた人達（大阪府下の進学塾に通う中学三年生141ケース）等を用いながら、中学生の進学意識の特徴をその「生き方」の問題と関連させて、「あいまいな進学動機」が再生産されるメカニズムを解明している。

本論文の特徴は、1) 中学生の心の世界を「意味を紡ぐ物語構成」の世界として把握する解釈的アプローチの採用（第一章）、2) 進学制度や入試選抜制度の問題を中学生たちの「社会的世界に対する遠近法的視座」による意味構成の問題として解釈する試み（第二章）、3) 進学をめぐる「相互行為」の状況を情報伝達＝情報取得の問題として捉える試み（第三章）、更に言えば、4) 以上の三つの異なる存在領域（「動機」「制度」「相互作用」）を独立に切り離して考察するのではなく、これらを「行為者」としての中学生たち本人の視座から一貫して理解する試み（終章）である。従来の社会学的研究は、動機の問題（＝理解社会学）、制度の問題（＝構造・機能的分析）および相互行為の問題（＝象徴的相互作用の理論）というふうな、それぞれを別個の問題領域として扱うタイプの研究が主流であった。また進学の動機づけと進学行為の因果関係を問題にする学歴アスピレーション研究もあった。著者は、これらのいずれの研究アプローチとも異なり、中学生の「眼差し」（行為者の視点）から照らし出される進学の「意味づけ」の問題に終始こだわりつづけている。選抜入試をめぐる社会的競争の真っ只中を生きる中学生の「生きられる」意味世界を赤裸々に描き出すことが問題だからである。観察者である著者が「行為者」である中学生たちの側に身を寄せるといふ研究方針に基づいて、中学生自身による「進学をめぐる物語構成と社会的状況の三層構造」論という一種の「進学の社会現象学的研究」を結実させたのである。本論文の最大の成果はこの点にある。

### [ 論文の各章構成 ]

#### 序章 受験生の進学動機の分析に向けて

##### 第一節 問題と意義

##### 第二節 本論文の構成

1. 「解釈図式」と「基底的な動機」

2. 「みえる制度」と「みえない制度」3. 「強い物語」と「弱い物語」

##### 第三節 調査について

第一章 あいまいな進学動機 - シュッツ＝パーソンズ問題の新たな地平をめざして -

第一節 方法について

- 1.理論と経験的事実 2.対象の定義と概念装置の定義

第二節 主観的意味理解のための概念装置

- 1-1.概念装置の考察1 (パーソンズの構築主義) 1-2.行為の主意主義的理論

- 1-3.「行為の主意主義的理論」の経験的事象に対する意義 2-1.概念装置の考察  
(シュッツの構成主義) 2-2.「レリヴァンス理論」と「動機の理論」

- 2-3.「レリヴァンス理論」と「動機の理論」の経験的事象に対する意義

第三節 事例研究

- 1.大阪府における高校進学状況 2.調査結果について 3-1.「行為の主意主義による考察」 3-2.結果の整理 4-1.「レリヴァンスの理論」と「動機の理論」による考察 4-2.結果の整理

第四節 考察

- 1.あいまいさの構造 2.「基底的な動機(構成主義と構築主義の関係)」

小括

第二章 制度としての受験 - 意味探しと物象化の構図 -

第一節 制度(客観的意味の構成と構築)

- 1.制度の定義 2-1.行為者の視座と行為 2-2.他者との関係

第二節 みえる制度

- 1.発生的意味連関 2.「発生的意味連関」の客観性

第三節 みえない制度

- 1-1.「認識される規制の意味連関」 1-2.「認識されない規制の意味連関」

- 1-3.「過去の規制の意味連関」 2.「規制の意味連関」の客観性

第四節 相互関係の定式化

- 1.諸制度間の位置関係 2.諸制度間の相互関係 3.さまよえる意味探し

小括

第三章 進学の相互行為論的考察 - 進学をめぐる受験生の物語構成を中心に -

第一節 高校進学の相互行為

- 1.進学の相互行為 2.進学の相互行為の相手 3.進学の相互行為の内容

第二節 他者との「出会い」(事例研究)

- 1.大人からみた進学の相互行為 2.子どもからみた進学の相互行為

第三節 それぞれの物語

- 1.絡めとる物語(絡束の言説) 1-1.「弱い」物語 1-2.「強い」物語

- 2.「出会い」の弱い社会 2-1.物語の紡げない社会 2-2.社会的状況における物語構成

小括(語られざる物語)

終章 進学をめぐる「動機」「制度」「相互行為」の全体連関

第一節 全体連関の整理(「動機」「制度」「相互行為」)

- 1.進学をめぐる物語構成と社会的状況の三層構成 2.過去の呪縛

第二節 「創造的な物語」の構築に向けて

## 1. 物語の可能性 2. 「創造的な物語」の構成の可能性

むすび

資料

参考文献一覧

## [ 論文の各章要約 ]

序章では、中学生の「あいまいな進学動機の再生産」という事実が指摘され、この事実のもつ問題性と本論文における接近の方法が概略される。「現在、高校進学率は96.8%だが、中学三年生に進学の原因を尋ねると『考えたことがない』『よくわからない』『将来、なりたいものが出てきたときのため』『楽しそうだから』という答えが返ってくる。『高校進学への動機づけ』の問題は、中学生たちの抱く「未来への物語」と密接に関わり、中学生たちが創造する「生」の物語の根源的な部分をなす問題である。進学の原因づけが「弱く、曖昧である」ということは、現代の「中学生の生き方」の曖昧さと弱さと関連する。著者は、「あいまいな進学動機の再生産」の問題を、中学生における主体形成の難しさの問題として捉える。問題を明らかにするやり方は、「現代の中学三年生たちに書いてもらった作文をもとに、彼らが高校進学への意識のあり方を、彼らの目線に観察者の目線を重ね合わせる形で、解釈を進める」というものである。

第一章は、二つの作業とその成果としての「基底な動機」概念の展開である。

「シュッツ=パーソンズ問題のあたらしい地平をめざして」という方法の明確化の作業が第一。序章において示唆された研究方針「中学生たちの目線に観察者の目線を重ね合わせる」とはいかなる意味か、またそれはどのようにして可能か。この問題は通常「他者理解」の問題といわれるが、著者はマックス・ヴェーバーの社会学における「行為者の意味理解」の問題に着目し、A.シュッツ=T.パーソンズの行為理論の論争に言及しつつ、両学説の基本にも触れて、最後に、シュッツとパーソンズの理論枠組みの複眼的併用の必要性を説く。行為者の「心」すなわち「行為者によって主観的に思われた意味」を現象学的に解明するシュッツの行為論の諸範疇（「目的の動機」「理由の動機」や「主題と解釈のレリヴァンス」など）は「中学生の目線」に接近するものとして、また科学的観察者の立場から「行為の準拠枠」によって行為者の「心」を把握するパーソンズの行為理論の諸範疇（規範、目的、状況-条件と手段-などの行為の諸要素）は、観察者の目線に接近するものとして関連づけ、中学生の進学動機の分析のための理論的枠組みとする。第二は、調査結果から幾つかの事例を問題発見的に選び出し、第一の作業で得られた理論枠組みによって、結果の整理が試みられる。結論を要約すれば、1.中学生の進学の原因として作文に表現されているさまざまな物語は「進学の意味について、行為者がどの程度、主題化し、解釈しているか」というレリヴァンスの観点」から類別できる。2.この作業の中で「行為者に意識されていない行為の有意味な根拠」の存在が確認される。即ち、進学の原因として中学生が語るさまざまな物語には、本人たちによって意識されていない動機、1.におけるシュッツの理論的枠組みには納まりきれない「動機」によって潜在的に規定されているという事実である。これを「基底な動機」と著者は名付ける。

第二章では、第一章の進学の原因「基底な動機」問題が「なぜ勉強してまで高校に行くのかな」という中学生の進学の原因「意味」問題-さまざまの意味探し-として捉え直されなおされ、制度の「物象化」論が展

開される。行為者（中学生）がその関心の眼差しを「直接の世界」から「同時世界」や「以前の世界」と呼ばれる世界へと移すにつれ、受験や進学の「制度」は<みえる>ものから<みえない>ものへと変様する。第一に、行為者の見地から「発生的意味連関」として理解される「制度」がある。「塾における友だち関係」のように、創設者同士の了解からなる、その成立、変更、解消の容易な<やわらかい>制度 - <みえる制度> - である。第二に、行為者の見地から「規制的意味連関」として理解される制度がある。行為者たち本人が生み出した制度ではなく、その発生と成立が「過去の世代」に負い、世代を越えて具現化されている<かたい>制度である。これには、A) 教室内でのクラスメートとか生徒と先生の地位・役割関係などのように、行為者（中学生）によって「認識される規制的意味連関」としての制度と、B) 塾を成立させる社会的需要、労使関係、業者関係などのように、行為者（中学生）に「認識されない規制的意味連関」としての制度とが区別される。第三に、「以前の世界」に由来し、一方的に現在の規制的意味連関のあり方を規定している「過去の規制的意味連関」がある。この「過去の規制的意味連関」としての受験制度が、中学生にとっては「みえない制度」となる。受験制度の発生の「意味」を理解し得ないまま、受験という「客観的意味連関」としての「行為様式」を採用することが、受験の「物象化」である。また「なぜ勉強までして高校に行くのかな」という疑問 - 中学生の「さまよえる意味探し」 - が、エポケー状態のまままでこの行為様式を未来にむかって「企図」するとき、中学生は「基底的な動機」の状態となる。

第三章では、進学をめぐる受験生の物語構成と社会的相互行為の状況との関係が考察される。要点のみ記す。1. 中学生たちの作文の「語り口」を調べると、「高校進学という客観的には単一の行動にみえるもののなかに、一人ひとりがどれ一つとして同じであり得ない、多様な「物語構成」の世界を生きている」ことがわかる。2. この物語構成は「弱い物語」と「強い物語」の二つのカテゴリーに分類できる。強い物語は、進学の「行動様式」を強く正当化する「意味づけ」であり、弱い物語は、進学の「行為様式」をとりあえず採用する「意味づけ」である。3. さらに進学をめぐる中学生の「社会的な相互作用」や「生き方の相互行為」に差異がみられる。これらは「濃い」と「薄い」の二つの様態に区別される。「濃い」社会的な相互作用は、「重要な他者」や「一般的な他者」が質量ともに強力に積極的に「進学の行為様式」を伝達する場合であり、「薄い」とは「重要な他者」や「一般的な他者」の一部のものから「進学の行為様式」が伝達される場合である。また「生き方の相互行為」が「濃い」とは、「生の物語」のモデルが「重要な他者」や「一般的他者」から強く呈示される場合であり、「薄い」とは、これらの周囲のものから消極的にしか呈示されない場合である。4. これらをクロスさせると、本文七十八頁に記載されているような「受験をめぐる物語構成と社会的相互行為の状況」の相関図が得られる。中学生たちは、さまざまな他者との「出会い」の中から高校進学の原因をさまざまに思い、他者との出会いを契機にして「自分の未来予想図」を描く。多様な物語、多様な現実世界の構成の秘密はそこにある。

終章は、あいまいな進学の動機をめぐる「動機」「制度」「相互作用」の全体連関を、進学をめぐる物語構成と社会的状況の三層構造（本文八十五頁-図4-）として定式化される。1. 内枠（micro）には、中学生たちの「構成する物語の4類型 - 弱い物語<sup>1,2</sup>, 強い物語<sup>1,2</sup> - 」が類別される。2. 中枠（mezzo）には、中学生が「直接の世界」において他者と関係を結ぶ「われわれ関係」 - 薄い出会い<sup>1,2</sup>, 濃い出会い<sup>1,2</sup> - が類別される。3. 外枠（macro）には、受験制度（みえない制度）の状態 - かたい受験制度<sup>1,2</sup>, やわらかい受験制度<sup>1,2</sup> - が類別される。4. 外枠のそとに「現代日本の大衆社会的状況」が広がる。これらの内枠、中枠、外枠の相互に

において「内側」に向かう矢印が記され、それによって制度（客観的意味）が相互作用の様態を規定し、その相互作用が動機（主観的意味・連関）を規定する制度の「社会化」の流れが示される。また外側への矢印は、動機（主観的意味・物語構成）にそって相互行為がなされ、制度（客観的意味）が持続される「実践」の流れをあらわす。この「制度 - 相互行為 - 動機」の連関モデルから、あいまいな動機の再生産される「過去の呪縛」が明らかにされるとともに、最後に、「創造的な物語」に向けての新しい物語の可能性が言及される。

#### 【論文審査の結果の要旨】

本論文の内容は以上の通りである。本論文の優れた点として評価できる事柄を以下に示す。

第一に、高校進学の問題について、主にシュッツ＝パーソンズの行為理論さらにG・H・ミードのシンボル相互行為論などの成果に依拠しながら、中学生の「眼差し」（行為者の視座）から進学動機の「意味づけ」の内容に接近し、選抜をめぐる競争社会の真っ只中を「生きる」中学生の「生きられる」意味世界 - 内面の世界 - を描き出す試みに成功している。教育社会学における「学歴アスピレーション研究」等とは大きく区別される。アスピレーション研究等も、入試選抜に向かう人々の「主観的要因」に注目する研究ではあるが、そこでは「主観的要因」をもっぱら生徒たちの「アスピレーション（学歴アスピレーション）」に求め、そのアスピレーションと進学行動との「因果関係」を考察の中心においている。本論文では中学生たちの「進学動機」という主観的要素の「意味連関」の構造にスポットが当てられている。

第二に、本論文は、独立した論文の単なる寄せ集めではなく、問題の提起、問題の展開および結論の導出に至るまで「論理の一貫性」と「体系性」が貫かれている。「中学生たちの視座から問題を把握する」という本論文の研究方針が、三つの異なる存在領域 - 「動機（第一章）」、「制度（第二章）」、「相互作用（第三章）」 - を別々に切り離さないで、三領域にまたがる一貫した分析の方策を生み、論文全体が中学生の「あいまいな」進学動機の「再生産」構造を明らかにする結果につながっている。

第三に、中学生の「主観的な意味」世界に接近する手法を様々に工夫していること。著者は、例えば、ある程度の数量をデータとして確保しながら、一人一人の「意味構成」の過程を知るといふ、二つの目的を両立させる工夫を試みている。大阪府下のある進学塾で三年間（1994-1997）にわたって「特定主題」に関する自由回答形式の作文（300-400字）を中学三年生の生徒に依頼し、回答を得ている（回答の総数141ケース）。さらに進学塾の場面等での中学生三年生との日常的接触によって「参与観察」の機会に恵まれたことも、論文の記述に際して役立っている。

第四に、論文の脚注はいずれもしっかりと記述されており、本文で記述されている事項の学問的内容を担保するといえる。以上は、本論文の評価されるべき美質の一部である。

しかしながら同時に、なお検討を要すると思われる論点の含まれていることも指摘しておきたい。

1. 著者は具体的データと抽象的理論との中範囲理論による統合を重視しているが、本論文はこの統合の要請にどう応えているか。一方におけるシュッツ＝パーソンズの理論的範疇の抽象性と他方における大阪府下の中学生の作文の具体的記述の間にはかなりの懸隔がある。著者の見解によれば、この研究に関しては「理論」と「データ」の間にそれ程深刻な対立はみられないということであるが、この中間を埋める「媒介概念」と「媒介理論」の問題については今後とも継続して考察すべきものであろう。

2. 媒介概念（制度と動機の間）として導入されている「基底的な動機」概念について。著者は「基底

的な動機」を「行為者に意識されない有意味の根拠」として導入している。しかし「行為者に意識されない有意味の根拠」としての「動機」というカテゴリーは、「行為者の視点（観察者の視点ではなく）にこだわる場合、成立するものだろうか。行為者が意識し、反省し、自覚しない状態で、どのようにして「有意味の根拠」が行為者の意識野に立ち現われるか、これは判然としない。勿論「行為者に意識される有意味の根拠」としての「動機」のカテゴリー - とは別に「行為者によって意識されない心的状態」はあり得る。「習慣」「伝統」「ハビタス」「儀礼主義」「当回事」「自明視」といった人間の行動様式は、行為者の「無意識状態」と「動機」の中間に入り込む、そのような性質のものであろう。ただし、この理由ゆえに「基底的な動機」のカテゴリーを鑄造し、今指摘した「心的世界」の存在に分析の光を当てた、本論文の功績はなんら否定されるものでない。

### 【試験または学力確認の結果の要旨】

審査委員会は学位請求論文を精読し、公聴会において質疑応答をおこなった。それらをとおして、本論文に示されている著者の卓越した着想や優れた識見は、専門的研究の研鑽、とりわけ著者の社会学理論や行為理論に関する積極的で意欲的な研究による豊かな学識に基づくものであることを確認した。タルコット・パーソンズやアルフレッド・シュッツ等の英書や独書原典を読みこなし、語学力も十分有することを確認した。審査委員会はまた学位請求者が本学研究科在籍中に学則に基づいて所定の単位を取得したことを確認した。

以上に基づき、審査委員会は、本学学位規定第18条第1項に基づき、学位を授与することが適当であると判断したのである。

審査委員	(主査) 佐藤 嘉一	立命館大学産業社会学部	教授
	松葉 正文	立命館大学産業社会学部	教授
	小澤 亘	立命館大学産業社会学部	助教授